



<研究ノート>ウェルナー・ゾムバルトの市民階級論
: 精神史社会史的研究の一例

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西村, 孝夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00002146

ウエルナー・ゾムバルトの市民階級論

——精神史社会史的研究の一例——

西村孝夫

一 ゾムバルト理論の概要

ヨーロッパの「市民階級」の社会・経済史的研究に手を染めようとする者が看過することのできない古典的な労作としてウエルナー・ゾムバルトの「市民階級」——近代経済人の精神史——(Sombari, W., *Der Bourgeois, Zur Geistesgeschichte des modernen Wirtschaftsmenschen*, Münc. & Lpz. 1923)がある。

彼は序言 (Vorwort) の中でいう、現代精神 der Geist unserer Zeit の生成と現況とを知ろうとすれば、その担い手

たるブルジョアの発生史が与えられねばならぬが、この観点からすれば、「市民階級 (ブルジョア)」という人間類型の精神的なもの (das Geistige) だけがわれわれの関心事であるべきで、その社会関係ではない」と (Derselbe, Vorwort)。一応この語は本書が純然たる精神史の類型に所属する研究のような印象を与えるが、ゾムバルト自身が社会経済史家であったために、かなりこの階級の「社会関係」 seine sozialen Beziehungen に立入っているのは、後に見る通りである。

さてゾムバルトによれば、「経済生活の精神」 Der Geist des Wirtschaftsleben とは「経済生活の領域に現われる凡ゆる精

神的なもの」すなわち、あらゆる経済活動に作用する精神、経済活動の下に現われる知性の発展や諸特徴、あるいは目標設定、価値判断、原則などをさしている。マックス・ウェーバーが局限したような「経済倫理」は、その一部分をしか成さない。精神的なものには才知とか誠実さとかのような一般的特性と、経済行程に即して現われる特殊な簿記原則といったものが含まれる。ところで、一体時・処を異にして異った精神が存しうるかどうかという問題があるが、彼は歴史家として、経済行為の下に現われる精神的特性は場合によって異なるという立場をとる。これは単なる「程度の差」以上のものである。彼は、この支配的な精神的特性の差によって経済生活の時期を画する。けだし資本主義精神を叙述せんとする時、これを特別な現象として把握、叙述することが必要であるからである。

このように第一章での理論的前提をおいてから、ゾムバルトはまず「前資本主義的経済精神」(die vorkapitalistische Wirtschaftsgesinnung)と名付けるものを第二章で取上げる。

資本主義以前の時代には生産も、消費も、身分や階級に応じて、「各自の必要に十分な」程度がその規準であって、貴族や僧侶の華美な生活に比して、一般人民の糊口しうるだけの

生活が対比される。生活さえ成立てばよいのだから、例えば計数についても誤謬だらけであった。これは物品の数量や交換価値よりは、その使用価値を重視する態度と関連する。経済活動は遅緩で、作業自体も甚だ遅かった。この活動を支配するものは伝統主義(Tradionalismus)である。個人はなお群団 Gruppe の一員にすぎず、新しいことよりは古い事の完成のみ目指す。

こうした静止的な社会を打破したのは資本主義の精神(der kapitalistische Geist)で、①その起源と発達を分析すること、②その原因と環境とを究明すること、第一篇 Erstes Buch、第二篇 Zweites Buch が当てられる。第一篇では、資本主義精神は企業精神 Unternehmensgeist と市民精神 Bürger-Geist との結合した所産であるから、それらのものを合成している諸要因に分けて考察する。

まず第一篇第三章では企業精神のうち、黄金欲 die Gier nach Gold und Geld が取扱われる。黄金欲がどうして起ったかは不明であるが、既にゲルマンの時代に金の装飾品・器具に対する欲求が見られた。中世には国王や貴族の装飾、贈答品、貢物などに用いられ、この風は僧侶にも波及した。しかし十三世紀頃から黄金欲は金銭、すなわち交換手段として

の金銀に対する欲望に変化し、ドイツ・フランス・イタリー、そしてスペインには特に財宝蓄積の習慣が根強く見られた。ユダヤ人と僧侶も例外ではない。近世に入ってから金銭の力は益々増大し、官職の買収、貴族と商人との通婚、国家政策を左右するに至り、十八世紀の初め、あるオランダの詩には「黄金は芸術よりも、健康よりも、否々、生命そのものより尊ぶ」(Ihr pflegt es weit mehr als Künste zur erheben, mehr als Gesundheit, mehr als alles Heyl und Leben) というような諷刺がよまれている。オランダ人に倣い、英、仏両国人も熱狂的に黄金を求め、この狂熱は現代の男女の心理の一部となった。

第四章では、この金銭を獲得する手段・方法 (Allerhand Mittel zur Geld-beschaffung) が論ぜられる。かつては、卸売業、金鉱山開発、富者遺産贈与、高利貸、牧場、馬の貸出、王室への奉仕、兵役につくこと、練金術、官吏就任、官職買収、富豪の従僕たること、国家への貸金などが挙げられ、また実行されたものがあるが、何れも資本主義精神の発達には阻止的である。資本主義企業の端緒となった諸方法としては、①強力的盗奪による、②魔法、奇術による、③企業計画や発明による、④金貨によるなどの諸手段があった。

とくに危険をおかすこと、投機は資本主義精神の発達に大きな影響を及ぼした。例えばチューリップ投機やジョン・ロウの計画がそれである。これらの諸手段が企業と結合して資本主義精神を産出した。

次に第五章では企業精神 (Das Wesen des Unternehmensgeistes) の本質が取上げられる。最広義の「企業」は「熟慮された計画を実行するに当たって、単一な意志の指導の下に、多数の個人が継続して協力すること」を指しているから、経済上の企業は企業全体の一部、資本主義企業はその経済的企業の一部にすぎぬ。

「企業精神」とはこのような企業に必要な心性を結合したものであるが、これを①征服者、②組織者、③商人としての三個の資質に分けて考えることができる。①では事業に対する思想、実行の意志と能力、②については適材の鑑識力、その適所配置、全体の調整の諸能力、③には雇人の使用の適切さ、かけ引の巧妙さが必要であり、総合していえば、経済事情の変化に対応する能力が要求される。

第六章では企業の起源が問題となる。すなわち、①軍事的企業、②荘園制度、③国家、④寺院と企業精神との関係が論ぜられる。①についていえば、統率と危険、給養の負担の諸

能力は成功する企業家に必要な能力と一致している。②については、一人が多数の人間を共同目的のために結合、支配するという点で、後の資本主義精神の発達を助長したという。③に関しては、国家による国民の組織と制限とは全体の利益に尽すという思想を国民の間に育てた。④もまた、その組織と活動とにおいて企業とほぼ同一の働きを行う。

第七章では資本主義的企業の根本形式が取扱われる。ゾムバルトは金銭欲と企業精神との合体は種々であるから、資本主義的企業家の種類もまた区々であり、企業を組織・形成した人間（＝企業家）の種類によって、①海賊、②地主、③官吏、④投機師、⑤商人、⑥製造業者の六種を挙げる。①に関して、近世初期の通商、植民の企業精神は海賊の精神と異らなかつたとし、②については鉱山、製鉄、機械、ガラス製造等に地主が果した役割を挙げ、③に関して国家を一の巨大な資本制企業となし、国王及び官吏等が企業精神を活潑にした史実を引用している。④の投機師が投機的企業の組織者となる時、資本制企業者となるとし、これは①③のように強力あるいは圧力を用いず、他人の心理を巧みに利用する点で異るとしている。⑤の商人についてはフロレンス、スコットランド、ユダヤの諸商人の例をあげる。最後に、⑥の製造業者

ウェルナー・ゾムバルトの市民階級論

は以上他の企業者よりもすぐれた新精神を要するとして、これを市民精神とゾムバルトは呼んで、第八、九章で説明する。第八章では市民道徳が問題となる。ところで、この場合、

「市民」Bürger とは何かについてゾムバルトはいう、「私は Bürger というとき、必ずしも一都市の住民や商人や手工業者を意味しているのではなくて、外部から Bürger として判る社会層からのみ発展したような特色ある形象、すなわち『』で括るといふやり方でしか特徴づけようのない全く特別な精神的特徴をもつ人間を指している」と (Derselbe, S. 135)。すなわち身分 Stand よりも、むしろ一つの類型 Typus としてブルジョアを見るのである。

フロレンスに始まる市民の発生はアルベルティのような、市民の典型的人物を生んだ。ゾムバルトはアルベルティにしたがって、実業内部の組織に関する道徳を「聖なる経済」die heilige Wirtschaftlichkeit、店主と客、店主と外界との関係に関する道徳を「実業道徳」die Geschäftsmoral と呼んで、これを分けて考察している(ここで読者はマックス・ウェーバーの与えた「対内道徳」Binnenmoral と「対外道徳」Außenmoral の別を想起されたい)。

「聖なる経済」の中核は勤勉、節約、中庸の精神で、これ

はアルベルティからデフォーを経て、ベンジャミン・フランクリンまでを流れる近世ブルジョアの中に生き続けた倫理であった。ゾムバルトはフランクリンの13の徳目をかかげている。次に「実業道德」には「営業における道德」*Moral beim Geschäft* と「営業のための道德」*Moral fürs Geschäft* とがある。前者は契約や対顧客関係、商業上の信用に係わる。したがって「契約誠実の道德」*eine Moral der Vertragstreue* とも称する。後者は実業家自身の品行方正な生活態度とこれから生ずる信用を指している。この中核は「正直」にあるとゾムバルトはいう。

次に第九章には計数観念がとり上げられる。資本制経済活動の目的は金額であるから、商業算術及び簿記に長ずることは最も重要な要因であると論じている。

さてここまで論じておいて、ゾムバルトは資本主義精神の出現が個々の国において著るしく異なりうるとしている(第十章)。けだし、資本主義発達の時期やそのプロセスに要した時間、その強度、範囲、組織要素の関係、その要素の発達能力が国によって異なるからである。

かくてゾムバルトは第十一章で、イタリー、スペインとポルトガル、フランス、ドイツ、オランダ、イギリス、アメリカ

カの諸国について資本主義精神の発達を考察する。アメリカはともかくこれらの諸国を挙げる視角は注目に値する。この点は後述する。

イタリーでは一番早く資本主義精神が現われ、ロムバルディアの商業諸国から十四世紀にはフロレンスに拡張した。しかし企業の精神そのものは漸次衰退し、一般に市民は競うて医師、法律家、官吏、あるいは貴族になり上ろうとする気風を生じた。これを「スペイン風の生活」*Hispanisierung des Lebens* と称した。

第二に、スペインとポルトガルも早くから資本家的精神が勃興し、あくない黄金欲と大胆な冒険企業が試みられ、また工業もセヴィル・トレド、セゴヴィア等に発達した。しかし十七世紀に入ると、企業の精神は衰え、国民は経済活動を捨て、宗教、宮廷、小貴族の生活に身を入れ、商工業を賤視し、イダルゴ *hidalgo* の株を得るのに熱中した。スペイン、ポルトガルの植民地にもこの風は波及した。

フランスは天才的な投機的企業者に富み、シャルル七世の時のジャック・クールやルイ十四世の朝のフーケをはじめとして、幾多の人物をもつ。しかし宰相コルベールの時代からフランス商人は企業精神に欠乏しており、大して勤勉でなか

った。そして貴族的の生活における奢侈に耽り、商工業よりはむしろ官僚となる氣風を生じた。商工業に対する輕侮の念はフランスにおいて最も強かった。

ドイツではフッカーの時代に資本主義精神が発達したが、特殊な場合でしかなく、極めて短期の間だけで、十九世紀半ばまでは殆んど大きな發達をしなかった。しかし一八五〇年以降、適應性、組織力、科学的態度においてすぐれ、商業計算も最も完全の域に達した。

オランダは資本主義精神が最も十分に成長した最初の国で十七世紀には最盛期にあった。後には國際的株式投機活動の中心となった。しかし計算術を除いて、他の資本主義精神の諸要素は衰えた。十八世紀半ばには金融業者の国になってしまった。

イギリスは十六世紀以来、資本主義企業が現出し、十七、八世紀投機企業が全盛を極め、十八世紀末には市民道徳や計數觀念において他国の模範となった。とくに十七世紀末よりスコットランドの發展は目覚ましかった。

しかし二十世紀二〇年代初めの現在では科学精神の欠如、傲慢な取引態度、貴族趣味などのため資本主義精神の衰退を見ている。

ウェルナー・ゾムバルトの市民階級論

アメリカについては植民地建設以来資本主義精神發達の可能性があったこと、急速な資本主義の發達を見、なおこの精神の力が衰えていないことを指摘するに止める。

次いで、ゾムバルトはブルジョアにも古いタイプのそれと新しいタイプとがあることに注目し、第十二章では古いタイプのブルジョアを論じている。古いタイプのブルジョアとはゾムバルトのいわゆる初期資本主義 *Frühkapitalismus* の時代の資本主義企業者で、近代のそれとは全く異なる。一口にいえばその思想と行動とにおいて生きた人間の禍福が規定的であった。つまり人間が万事の尺度である *omnium rerum mensura homo* という前資本主義的な理念が支配していた。実業は生活の方法にしかすぎなかった。富は直接の目的ではなく、生活上の必要に應ずべきものであり、実業活動も遅々として、楽隠居をする風が一般的であり、静止原則 "*statische Prinzip*" が經濟活動を支配していた。競争や顧客に対する態度にもこの原則が見られる。生産は消費者の利益のためにするという思想があった。技術上の改良は人間の幸福を増進する限り認められたにすぎぬ。

過不足のない生活のために生産するという伝統的な生活法が經濟生活の基礎にあった。これらは宮利の無限の發達、企

業精神、経済的合理主義に対する障害となった。

これに対して第十三章における近代の実業家の特長についてゾムバルトはいう。まず第一に近代の実業家の目的は利欲心と事業の無限大の拡張にあつて、これを見れば、丁度子供が、より大きく、速やかに、物珍らしく、強力になろうとする心理に似ており、分量や大きさのみを重んずるとか、交通機関の速度を増加するとか、新奇なものを追い、また他人に優越しようとする態度がそれである。この理想にしたがつて、懸引や株式の操縦、計算の精密化、無限の活動が要求せられるようになった。かくして、絶対の合理主義、交換を目的とする生産、顧客を探してこれに襲いかかるとか、安価販売、自由と競争の諸主義が近代の企業活動を支えている。勤勉とか、節約、正直といった市民道徳は個人の精神生活から企業の客観主義に変化してしまつた。

ただし、以上の点に関しては中小規模の企業と大企業とは事情は異り、資本主義精神が十分発達しているのは後の場合である。ゾムバルトは注意している。

以上でゾムバルトは第一篇を終え、第二篇では資本主義精神の淵源すなわち原因と環境とが考察される。

まずこの問題に関する理論的前提として、彼は①資本主義

精神を組織する要素は様々であるから、その起源も相違する。

②初期資本主義の時代には企業家が資本主義を産出したのに反して、高度資本主義 Hochkapitalismus の時代には資本主義が企業者を産出したと述べた後、この篇では資本主義精神の個々の要因に分けて一々その起源を問うことをやめて、資本主義精神の結果から、これを産出した諸原因を求めるといふ方法をとるといっている。すなわち、資本主義精神の①生物学的基礎、②精神的勢力の影響、③社会的状態の影響を論ずる。

第一に生物学的基礎を分けて、ブルジョアの気質と国民性とする。

第十五章において前者をとり上げる。完全なブルジョアには、①企業家気質と②ブルジョア気質との二つがなければならぬ。

①企業家気質はこれを知慮、聰明、想像という三つの心理に分けられるが、この他に生氣と意志とが伴わねばならない。

②ブルジョア気質は解剖するのが少々困難であるが、そうでない人間類型と比較してみる他ない。ブルジョアは貯えるとか、節約とか、組織、訓練、教育、冷静など様々の特質がそこに見られる。

次に第十六章の国民性においては、彼はケルト民族、ゲルマンの中のゴス族を資本主義に傾かなかつたとし、ケルトの後えいとしてアイルランド人、仏人の一部、スペイン人等をあげている。しかし資本主義に傾いた国民には英雄的国民と商業国民の二種があつて、イタリア、スペインの一部ゴール、西ゲルマン等を前者とし、フロレンス、スコットランド人、ユダヤ人を後者の例として挙げている。

こうして次にゾムバルトは資本主義精神の生成に及ぼした精神的諸勢力に言及する。その最初は第十七章の哲学である。例えば功利主義やストア哲学のフロレンス商人への影響を彼は挙げている。第十八章では、宗教をあげ、カトリック、新教、ユダヤ教の三つが論ぜられ、カトリックの場合としてフロレンス、トスカニーの例をあげ、またこの派の懺悔が経済活動上の主義について及ぼした影響力を強調している。第二に新教はおそるべき偉力を以て人心を左右したし、ユダヤ教は初期資本主義の時代に特に影響力が大きかつたとして、続く第十九、二十、二十一章で順次、これらの宗教の資本主義精神への影響を論ずる。

まずカトリックは、スペインとアイルランドの例を除いては初期の資本主義の発達を大いに助長した。法王とその財政

ウェルナー・ゾムバルトの市民階級論

政策がそれである。教義の点からいえば、アキイナスの「人生を合理的ならしめよ」との教義は資本主義精神の発達に大きな刺戟であつた。奢侈を戒め、怠惰を排し、また商業上の正直を教えたのも、このスコラ学派の功績であつた。

またゾムバルトは通説に反して、後期のスコラ学者が利子禁止を主張したのは資本主義企業の敵たる貸付業者を憎悪したのだという(第十九章)。

新教は逆に資本主義的経済観の敵であつて、ルーテルも、カルヴィンもこの点では資本主義反対であつた。とくに清教徒は貧に対して同情的で、バクスターの礼拝書にそれが見られる。ある点では無意識の裡にこれを助長した点もある。例えば市民道徳、とくに勤勉、節制、節約については、スコラ学とはほぼ同一の考えをもっていた。無限の営利欲や大企業はピューリタニズムとは何の関係もない。この点はウェーバーと全く対立した見解に立っている(第二十章)。

最後に、ユダヤ教は資本家精神に便利な教えを立て、倫理的にこれを推進めた。ユダヤ教は富を理想としていた。ユダヤ教には対内道徳と対外道徳との二重側面があつて、その商業主義は特殊の傾向を帯びた。ユダヤ人は自由貿易及び資本主義の元祖である(第二十一章)。

ところでゾムバルトは資本家精神が哲学や宗教によって出来たものではなく、哲学や宗教こそ当時の経済状態の反映にすぎないという異論を第二十二章で吟味する。しかしこの点については、ゾムバルトは富者が新しければ新しいほど経済生活に及ぼす感化は強いとして、初期のカルヴィン主義の場合をあげている。しかもこの感化には個人的な場合と外部的な場合との二つがあると分けている。ただ資本主義が完全に発達し切ってしまうと精神勢力は過大視されなくなるといふ。

以上の如く論じて、最後に資本主義精神に及ぼした社会的状態の影響として、第二十三章の国家、第二十四章の移住、第二十五章の貴金属とその発見、第二十六章技術的發明、第二十七章前資本主義時代の職業、第二十八章本来の資本主義の影響を挙げる。

第一に、国家は資本主義の進歩を助けようとして様々の規定を設け、また政策の上から資本主義の利益を覚らせようとし、特権制度で企業を奨励したし、また教育を通じて資本主義精神の培養を計った。官吏組織、軍隊制度、国家の宗教政策等もまたそのような作用を及ぼした。

次に移住も資本主義の発達に大きな作用があった。ロムバ

ルディ人やルツカ人のヴェニスやゼノアあるいはコンスへの移住は個人的移住の例であるが、団体的移住としては、ユダヤ人、新教徒、植民（とくにアメリカ）運動の三つがある。移住者は危険を冒して新しい土地に移住するので、最も活動的で企業心に富む人々である。その上、彼等は新しい土地では利益以外に何の望むべきものを有たない。将来を保証する手段は金銭より他にはない。

第三に、貴金属とその発見は、貨幣経済という資本主義の基礎を提供し、財産の集中の衝動（資本家精神）を刺戟し、投機を増大するなどという作用を有する。

第四に、技術的發明は製造や物・人・報知の運搬に関する技術的發明をいうが、その資本主義への影響は直接的、間接的である。直接的にいえばかつての家内工業における経験主義と口伝クワデンとに代えるに、新しい資本的企業は合理主義と科学主義の上に立っている。経済的合理主義の発達は科学技術の進歩に負うている。物質や営利に対する評価や欲求もそうであるし、また人間中心主義の崩壊もそうである。間接的には、金銀鉱の開発と人口増加⇓移住によって資本主義精神の発達に作用している。

さらに第二十七章では、資本主義時代以前の職業の影響が

あげられる。商業・貿易は商品の品質ではなく交換価値のみに着目する。またとくに外国貿易は対外信用の商業道徳や企業心を旺盛ならしめる。また金貨業は金銭の分量だけが問題であるから、資本主義精神の源泉であった。計算と危険負担とは彼等の本領であった。また組合制度は市民階級の道徳に対して影響を与えた。

最後に第二十八章では資本主義自体の影響が論ぜられる。ゾムバルトは資本主義形態と資本主義社会組織を区別し、資本主義精神がその形態や組織を作ったと強調する。しかし一旦組織が作られてしまえば、それはさらに資本主義精神を生む。かくて資本主義自体が資本主義精神を作ることになる。とくに科学進歩と実業の組織とは資本家として一日も休みない経済活動にかり立てる。

最後に第二十九章において結論として、「回顧と展望」とが与えられる。黄金欲と企業精神とは資本主義の精神を進歩せしめ、これに科学、発明、投機、ユダヤ人の感化、宗教感情の稀薄化、新世界への移住等の諸事情が加わった。もはや資本主義という巨人を牽制することは出来ない。だが資本主義精神そのものの中に自らを破壊する要素があり、また現代企業の官僚的性格の強化や、人口減少等の結果からも資本主義

は崩壊の可能性が生ずる。しかしそれが何時かということには本書で答えるべき問題ではないとゾムバルトはいつている。

二 諸問題点

以上見るようにゾムバルトの分析は、極めて心理学的、社会学的である。同時に、時々彼が触れているように、マルクスやウェーバーの諸研究がたえず念頭におかれていることに注目すべきである。明かに彼はマルクス、ウェーバーに対して批判的であり、マルクスの階級的存在が階級意識を制約するとの命題とは正に反対のことを主張しているし、ウェーバーに対してはピューリタニズムの倫理と資本主義の精神との因果連関に関するあの有名な業績を真向から否定し、その関連を否定している。

しかしゾムバルトの出発点とした人間のタイプとしての「ブルジョア」(身分や階級ではないことに注意)から出発する限り、当然こういふ結論が出てくる。なぜならば、ここで問題になっているのは、個人的なブルジョア心理であり、階級としてのあるいは社会関係におりこまれた諸個人としてのブルジョアの意識ではないのだから、社会的制約の側面は最初から捨象されてしまっている。またウェーバーの場合問題の中

心におかれているのは、資本主義の精神であって、ゾムバルトのごとく資本家の精神ではない。ゾムバルトのウェーバー批判にこの点で混乱がある。ゾムバルトには賃金労働者をも含む「中産的産業層」die industrielle Mittelstande を設定しているウェーバーの問題設定の鋭さが見えていないのである。

勿論、ゾムバルトは広汎該博な知識の持主だけに、資本主義精神を克明・多角的に分析しているが、雑多な諸心理特徴を分析し尽した結果、それらの諸特徴が資本主義精神をどのように形成しているのかはゾムバルトの分析からは出て来ない。とりわけ、彼が力点を置いている「資本主義精神が資本主義の社会組織を作り出した」という命題はそう主張されているだけであって、その歴史論理的なプロセスは説明されていないので、この主張の裏付けとなりうるものがないといわねばならない。ゾムバルトの論理を延長すれば、このようなブルジョアタイプの間が次第に増加し、あるいは社会を支配すれば、自動的に資本主義社会が誕生するということになる訳であるが、逆に彼の資本主義崩壊論が説明不能となろう。ゾムバルトの分析はたしかに多彩ではあるが、あくまで社会学||心理学的分析であって、歴史的構成の総合的研究ではない。

資本主義精神が近代ヨーロッパの諸文化とどういう関わり合いをもつか。ウェーバー流にいえば、近世文化がヨーロッパ、とくに西ヨーロッパにのみ固有であるという歴史的事情については、ゾムバルトからは何もものをも聞くことは出来ない。現象だけを見れば、ゾムバルトが挙げるような諸要素は断片的には東洋にも、あるいは古代・中世にもみられるのであって、それが近世ヨーロッパにのみ特異な文化現象として存在したという必然的な理由をゾムバルトは説明していない。つまり「歴史家」ゾムバルトは単なる社会学者、心理学者として立現われているといえる。

ゾムバルトのこの社会学||心理学的分析に社会科学的存在あるいは文化史的整理を与えうる視角は、むしろゾムバルトの批判している「ブルジョア||社会層または階級」論の中にこそ求められるのではないか。この点、われわれの別稿「市民階級」(ヨーロッパ近世文化研究会報告一九六七年度)を参照してほしい。

(付記 筆者のこの方面の研究は、ヨーロッパ近世文化研究会の総合研究の分担課題「近世ヨーロッパ文化の社会経済史的要因」の一部として行っているものであり、これに対して昭和四十二年度文部省科学研究助成金が与えられた。)